

## 試験の公平性

大津 隆文

旧正月の時期に沢山の外国人旅行者が来日し、その人気訪問地に東大の赤門が入っていると報じられた。過日のテレビでは赤門前で、将来この大学に入りたいという中国人の子供が紹介され、親は中国の大学受験競争は激烈なので東大も選択肢、と語っていた。

試験制度は本来出自、身分、親の影響力とは関係なしの公平なシステムである。しかし受験競争が激しくなると、早くスタートするほど、さらに受験塾や家庭教師などの支援体制が充実しているほど有利になる。その結果親の経済力が高いほど有利という現象に至る。一流校に入るのは主に上流階級の子と、社会の流動性が低下し、格差が固定化（親ガチャ）するようになっては大問題である。

私達の時代には大切なのは本人の努力であり、努力の結果が試験の結果に出るといふ漠然とした信頼感があった。私自身も入学試験、期末試験、就職試験で比較的良好な結果を残せたのも人一倍頑張ったお蔭と自負し、やましさを感じずることはなかった。

同時に才能は多様で、自分は学校の勉強は得意だが、運動や音楽では平均以下ののと、学力試験では記憶力のウエイトが高く独創力などは十分には計れないこと、学力と人間性とは関係ないことも十分自覚してきたつもりである。

ただし一度論されたことがある。君は本人の努力次第と云うが、努力が出来るというのも才能で、世の中にはその才能に欠ける人もいるのだよ、と。だとすればそもそも人は本当に平等に生まれているのかという疑問がわいてくる。

哲学者マイケル・サンデル教授は行き過ぎた能力主義（報酬格差）に警鐘を鳴らしており、「能力主義の是正のため、大学入試において、一定の実力がある入学希望者の『くじ引き』選抜を提案する」という。しかしこれが本当に公平かについては異論があろう。真の公平とは何だろうか。

大学は社会にとって必要な人材を育てる場でもある。この国をリードしていく有能な若者を広く公平に選抜する試験の内容、方法であってほしい。